



一握の砂

石川啄木

藍岩堂



# 一握の砂



藍岩堂



函館なる郁雨宮崎大四郎君  
同国の友文学士花明金田一京助君

この集を両君に捧ぐ。予はすでに予のすべてを両君の前に示しつくしたるものの如し。従つて両君はここに歌はれたる歌の一につきて最も多く知るの人なるを信ずればなり。  
また一本をとりて亡児真一に手向く。この集の稿本を書肆の手に渡したるは汝の生れたる朝なりき。この集の稿料は汝の薬餌となりたり。而してこの集の見本刷を予の閲したるは汝の火葬の夜なりき。

著者

明治四十一年夏以後の作一千余首中より五百五十一首を抜きてこの集に収む。集中五章、感興の  
来由するところ相<sup>ちか</sup>邇きをたづねて仮にわかつてのみ。「秋風のころよさに」は明治四十一年秋  
の紀念なり。

## 我を愛する歌

とうかい こじま いそ しらすな  
東海の小島の磯の白砂に

な  
われ泣きぬれて

かに  
蟹とたはむる

ほ  
頬につたふ

なみだのごはず

いちあく しめ  
一握の砂を示しし人を忘れず

だいかい ひとり  
大海にむかひて一人

ななやうか  
七八日

い  
泣きなむとすと家を出でにき

さ い  
いたく錆びしピストル出でぬ

すなやま  
砂山の

ほ  
砂を指もて掘りてありしに

よ あらしきた きづ  
ひと夜さに嵐来りて築きたる

この砂山は

なに はか  
何の墓ぞも

はらば  
砂山の砂に腹這ひ

初恋の

い  
いたみを遠くおもひ出づる日

すそ りうぼく  
砂山の裾によこたはる流木に

あたり見まはし

ものい  
物言ひてみる

いのちなき砂のかなしさよ

さらさらと

にぎ  
握れば指のあひだより落つ

しっとり

なみだを<sup>す</sup>吸へる砂の玉  
なみだは重きものにしあるかな

だい  
大という字を百あまり  
砂に書き

死ぬことをやめて<sup>きた</sup>帰りに来れり

目さまして<sup>なほお</sup>猶<sup>い</sup>起き出でぬ<sup>くせ</sup>児の癖は  
かなしき癖ぞ  
母よ<sup>とが</sup>咎むな

ひと<sup>くれ</sup>塊の土に<sup>よだれ</sup>涎し  
泣く母の<sup>にがほ</sup>肖顔つくりぬ  
かなしくもあるか

ほかげ<sup>しつ</sup>燈影なき室に我あり  
父と母

壁のなかより<sup>つゑ</sup>杖<sup>い</sup>つきて出づ

たはむれに母を<sup>せお</sup>背負ひて  
そのあまり<sup>かる</sup>軽きに泣きて  
三步あゆまず

へうぜん<sup>い</sup>飄然と家を出でては  
飄然と帰りし癖よ  
友はわらへど

ふるさとの父の<sup>せき</sup>咳<sup>たび</sup>する<sup>か</sup>度に斯く  
咳の<sup>い</sup>出づるや  
病めばはかなし

わが泣くを<sup>をとめら</sup>少女等きかば  
病犬の<sup>やまいぬ</sup>  
月に<sup>ほ</sup>吠ゆるに似たりといふらむ

いづく  
何処やらむかすかに虫のなくごとき  
ほそ  
こころ細さを  
けふ  
今日もおぼゆる

いと暗き  
あな す  
穴に心を吸はれゆくごとく思ひて  
つかれて眠る

こころよく  
我にはたらく仕事あれ  
しと  
それを仕遂げて死なむと思ふ

あ すみ  
こみ合へる電車の隅に  
ちぢこまる  
ゆふべゆふべの我のいとしさ

あさくさ よ  
浅草の夜のにぎはひに  
い  
まぎれ入り  
い き  
まぎれ出で来しさびしき心

あいけん き  
愛犬の耳斬りてみぬ  
あはれこれも  
う  
物に倦みたる心にかあらむ

かがみ  
鏡とり  
あた  
能ふかぎりのさまさまの顔を試してみぬ  
あ  
泣き飽きし時

なみだなみだ  
不思議なるかな  
あら おど  
それをもて洗へば心戯けたくなれり

あき  
呆れたる母の言葉に  
気がつけば  
ちやわん はし たた  
茶碗を箸もて敲きてありき

草にね臥て  
おもふことなし  
わがぬか額ふんに糞して鳥は空に遊べり

わがひげ髭の  
下向くくせ癖がいきどほろし  
このごろにく憎き男に似たれば

森の奥よりじうせい銃声聞ゆ  
あはれあはれ  
みづか自ら死ぬる音のよろしさ

たいぼく大木みきの幹に耳あて  
こはん小半日  
かた堅き皮をばむしりてありき  
「さばかりの事に死ぬるや」  
「さばかりの事に生くるや」  
よ止せ止せ問答

まれにある  
このたひら平なる心には  
時計の鳴るもおもしろくき聴く

ふと深き怖れを覚え  
ぢっとして  
やがて静かにほそ臍をまさぐる

たかやま高山のいただきに登り  
なにがなしにぼうし帽子をふりて  
くだ下り来しかな

どこ何処やらにたくさん沢山の人であらそひて  
くじひ鬮引くごとし  
われも引きたし



いか  
怒る時

かならずひとつ鉢を割り  
くひやくくじふく  
九百九十九割りて死なまし

いつも逢ふ電車の中の 小男 の  
かど まなこ  
稜ある 眼  
このごろ気になる

かがみや  
鏡屋 の前に来て  
ふと驚きぬ  
見すぼらしげに歩むものかも

なに  
何となく汽車に乗りたく思ひしのみ  
お  
汽車を下りしに  
ゆくところなし

あきや い  
空家に入り  
たばこ  
煙草のみたることありき  
あはれただ一人居たきばかりに

何がなしに  
さびしくなれば出であるく男となりて  
みつぎ  
三月にもなれり

やはらかに積れる雪に  
ほ ほ うづ  
熱てる頬を埋むるとき  
恋してみたし

かなしきは  
あ りこ  
飽くなき利己の一念を  
持てあましたる男にありけり

手も足も  
へや だ  
室いっばいに投げ出して

やがて静かに起きかへるかな

ももとせ <sup>さ</sup>  
百年の長き眠りの覚めしごと

あくび  
呟呻してまし  
思ふことなしに

うでく  
腕拱みて

このごろ思ふ

おほ <sup>てき</sup> <sup>をど</sup> <sup>い</sup>  
大いなる敵目の前に躍り出でよと

手が白く

か <sup>だい</sup>  
且つ大なりき

ひぼん  
非凡なる人といはるる男に会ひしに

こころよく

<sup>ほ</sup>  
人を讃めてみたくなりけり

<sup>りこ</sup> <sup>う</sup>  
利己の心に倦めるさびしさ

雨降れば

<sup>いへ</sup> <sup>たれ</sup>  
わが家の人誰も誰も沈める顔す

<sup>は</sup>  
雨霽れよかし

高きより飛びおりるとき心もて

この一生を

終るすべなきか

この日頃

ひそかに胸にやどりたる <sup>くい</sup> 悔あり

われを笑はしめざり

へつらひを聞けば

<sup>はらだ</sup>  
腹立つわがこころ

あまりに我を知るがかなしき

<sup>いへ</sup>  
知らぬ家たたき起して

<sup>に</sup> <sup>く</sup>  
遁げ来るがおもしろかりし

昔の恋しさ

ひぼん  
非凡なる人のごとくにふるまへる  
のち  
後のさびしさは  
なに  
何にかたぐへむ

おほ からだ  
大いなる彼の身体が  
にく  
憎かりき  
その前にゆきて物を言ふ時

びと  
実務には役に立たざるうた人と  
我を見る人に  
金借りにけり

ね  
遠くより笛の音きこゆ  
ゆゑ  
うなだれてある故やらむ  
なみだ流るる

それもよしこれもよしとてある人の  
その気がするさを  
ほ  
欲しくなりたり

死ぬことを  
ちやく  
持薬をのむがごとくにも我はおもへり  
心いためば

みちばた あくび  
路傍に犬ながながと吠呻しぬ  
まね  
われも真似しぬ  
うらやましさに

う  
真剣になりて竹もて犬を撃つ  
せうに  
小児の顔を  
よしと思へり

ダイナモノ  
うな  
重き唸りのここちよさよ  
あはれこのごとく物を言はまし

へうきん さが  
剽軽の性なりし友の死顔の  
青き疲れが  
いまも目にあり

つか  
気の変る人に仕へて  
つくづくと  
わが世がいやになりけるかな

りよう をど い  
龍のごとくむなしき空に躍り出でて  
消えゆく煙  
あ  
見れば飽かなく

こころよき疲れなるかな  
息もつかず  
のち  
仕事をしたる後のこの疲れ

そらねいりなまあくび  
空寝入生吐呻など  
なぜするや  
思ふこと人にさとらせぬため

はしと  
箸止めてふっと思ひぬ  
やうやくに  
世のならばしに慣れにけるかな

朝はやく  
こんき  
婚期を過ぎし妹の  
こひぶみ ふみ  
恋文めける文を読みりけり

しっとり  
す かいめん  
水を吸ひたる海綿の  
こち  
重さに似たる心地おぼゆる

おのれ いか  
死ね死ねと己を怒り  
もだしたる  
心の底の暗きむなしさ

けものめく顔あり口をあけたてす  
とのみ見てみぬ  
人の語るを

親と子と

はなればなれの心もて静か<sup>むか</sup>に対心  
気まづきや何ぞ<sup>な</sup>

かの船の

かの航海の船客<sup>せんかく</sup>の一人にてありき  
死にかねたるは

目の前の菓子皿<sup>くわしざら</sup>などを

かりかりと噛<sup>か</sup>みてみたくなりぬ  
もどかしきかな

よく笑ふ若き男の

死にたらば  
すこしはこの世さびしくもなれ

何がなしに

息<sup>いき</sup>きれるまで駆け出<sup>か</sup>して<sup>だ</sup>みたくなりたり  
くさはら  
草原などを

あたらしき背広など着て

旅をせむ  
しかく今年も思ひ過<sup>ことし</sup>ぎたる

ことさらに燈火<sup>ともしび</sup>を消して  
まちまちと思ひてゐしは  
わけもなきこと

浅草の凌雲閣<sup>りょううんかく</sup>のいただきに

腕組みし日の  
長き日記<sup>にき</sup>かな

尋常<sup>じんじやう</sup>のおどけならむや

ナイフ持ち死ぬまねをする  
その顔その顔

こそこその話がやがて高くなり  
ピストル鳴りて  
人生終る

時ありて  
子供のやうにたはむれす  
恋ある人のな<sup>わざ</sup>さぬ業かな

とかくして家を出<sup>い</sup>づれば  
日光のあたたかさあり  
息ふかく吸心

つかれたる牛のよだれは  
たらたらと  
千万年も尽きざるとし

みちばた <sup>きりいし</sup>  
路傍の切石の上に  
<sup>く</sup>  
腕拱みて  
空を見上ぐる男ありたり

何やらむ  
おだや <sup>めつき</sup>  
穩かならぬ目付して  
つるはし  
鶴嘴を打つ群を見てゐる

<sup>けふ</sup>  
心より今日は逃げ去れり  
やまひ <sup>けもの</sup>  
病ある獣のごとき  
不平逃げ去れり

おほどかの心来れり  
あるくにも  
腹に力のたまるがごとし

ただひとり泣かまほしさに  
来て寝たる  
やどや <sup>やぐ</sup>  
宿屋の夜具のころよさかな

友よさは

こじき いや いと  
乞食の卑しさ厭ふなかれ  
う しか  
餓ゑたる時は我も爾りき

新しきインクのにほひ

せんぬ  
栓抜けば  
し  
餓ゑたる腹に沁むがかなしも

かなしきは

のど  
喉のかわきをこらへつつ  
よざむ  
夜寒の夜具にちぢこまる時

一度でも我に頭を下げさせし

人みな死ねと  
いのりてしこと

ふたり  
我に似し友の二人よ

一人は死に

らう い や  
一人は牢を出でて今病む

いだ  
あまりある才を抱きて

妻のため

おもひわづらふ友をかなしむ

打明けて語りて

そん  
何か損をせしごとく思ひて  
友とわかれぬ

どんよりと

くもれる空を見てゐしに  
人を殺したくなりけるかな

ひとなみ さい  
人並の才に過ぎざる

わが友の

深き不平もあはれなるかな

たれ  
誰が見てもとりどころなき男来て

ゐば  
威張<sup>り</sup>て帰<sup>りぬ</sup>  
かなしくもあるか



はたらけど

はたらけど猶わが生活なほ ぐらし楽にならざり  
ぢっと手を見る

何もかも行末ゆくすゑの事みゆるごとき  
このかなしみは  
ぬぐ  
拭ひあへずも

とある日に  
酒をのみたくてならぬごとく  
けふ せち かね ほ  
今日われ切に金を欲りせり

すゐしやう  
水晶の玉をよろこびもてあそぶ  
わがこの心  
なに  
何の心ぞ

事もなく  
か こ  
且つこころよく肥えてゆく  
わがこのごろの物足らぬかな

大いなる水晶の玉を  
ほ  
ひとつ欲し  
それにむかひて物を思はむ

ほ  
うぬ惚るる友に  
あひづち  
合榼うちてゐぬ  
ほどこし  
施与をするごとき心に

ある朝のかなしき夢のさめぎはに  
い き  
鼻に入り来し  
みそ に か  
味噌を煮る香よ

あきち  
こつこつと空地に石をきざむ音  
き  
耳につき来ぬ  
いへ い  
家に入るまで

何がなしに

あたま かけ  
頭 のなかに崖ありて

ひごと  
日毎に土のくづるごとし

ゑんぼう りん  
遠方に電話の鈴の鳴るごとく

けふ  
今日も耳鳴る

かなしき日かな

あか あはせ えり  
垢じみし 袷 の襟よ

かなしくも

くるみ や  
ふるさとの胡桃焼くるにほひす

死にたくてならぬ時あり

さ  
はばかりに人目を避けて

こは  
怖き顔する

一隊の兵を見送りて

かなしかり

なに な  
何ぞ彼等のうれひ無げなる

くにびと いや  
邦人の顔たへがたく卑しげに

目にうつる日なり

家にこもらむ

やすみ  
この次の休日に一日寝てみむと

思ひすごしぬ

みとせ  
三年このかた

或る時のわれのころを

焼きたての

ばん  
麵麩に似たりと思ひけるかな

たんたらたらたんたらたらと

あまだれ  
雨滴が

痛むあたまにひびくかなしさ

ある日のこと

へや しょうじ

室の障子をはりかへぬ

その日はそれにて心なごみき

を

かうしては居られずと思ひ

立ちにしが

おもて いなな

戸外に馬の嘶きしまで

らうか

気ぬけして廊下に立ちぬ

ドア お

あららかに扉を推せしに

あ

すぐ開きしかば

ぢっとして

黒はた赤のインク吸ひ

かいめん

堅くかわける海綿を見る

たれ

誰が見ても

われをなつかしくなるごとき

ゆふべ

長き手紙を書きたき夕

うすみどり

からだ

す

飲めば身体が水のごと透きとほるとふ

薬はなきか

にら

あ

いつも睨むランプに飽きて

みか

三日ばかり

らふそく

蠟燭の火にしたしめるかな

人間のつかはぬ言葉

ひよっとして

われのみ知れるごとく思ふ日

あたらしき心もとめて

名も知らぬ

けふ

き

街など今日もさまよひて来ぬ

友がみなわれよりえらく見ゆる日よ

花を買ひ来て<sup>き</sup>  
つま  
妻としたしむ

なに  
何すれば  
ここ  
此処に我ありや  
うちおどろ　へや  
時にかく　打驚　きて室を眺むる

人ありて電車のなかに唾<sup>つば</sup>を吐<sup>は</sup>く  
それにも  
心いたまむとしき

夜明けまであそびてくらす場所<sup>ほ</sup>が欲し  
いへ  
家をおもへば  
つめ  
こころ冷たし

人みな<sup>いへ</sup>が家を持つてふかなしみよ  
い  
墓に入るとく  
かへりて眠る

何かひとつ不思議を示し  
人みなのおどろくひまに  
消えむと思ふ

人といふ人のところに  
しうじん  
一人づつ囚人がゐて  
うめくかなしさ

しか  
叱られて  
だ  
わっと泣き出す子供心  
その心にもなりてみたきかな

盗むてふことさへ悪<sup>あ</sup>しと思ひえぬ  
心はかなし  
が  
かくれ家もなし

はな  
放たれし女のごときかなしみを  
よわき男の  
かん  
感ずる日なり

にはいし  
庭石に  
はたと時計をなげうてる  
いか  
昔のわれの怒りいとしも

いか  
顔あかめ怒りしことが  
あくる日は  
さほどにもなきをさびしがるかな

なれ  
いらだてる心よ汝はかなしかり  
いざいざ  
あくび  
すこし呟呻などせむ

女あり  
そむ くだ  
わがいひつけに背かじと心を砕く  
見ればかなしも

ふがひなき  
ひ もと をんなら  
わが日の本の女等を  
あきさめ よ  
秋雨の夜にののしりしかな

まじ  
男とうまれ男と交り  
負けてをり  
し  
かるがゆゑにや秋が身に沁む

いだ  
わが抱く思想はすべて  
かね いん  
金なきに因するごとし  
秋の風吹く

くだらない小説を書きてよろこべる  
あは  
男憐れなり  
はつあき  
初秋の風

秋の風

けふ か  
今日よりは彼の心やけたる男に  
き  
口を利かじと思ふ

はても見えぬ

ますぐ  
真直の街をあゆむごとき  
ころを今日は持ちえたるかな

何事も思ふことなく

いそがしく  
ひとひ  
暮らせし一日を忘れじと思ふ

かねかね  
何事も 金金 とわらひ

へ  
すこし経て  
には く  
またも俄かに不平つのがり来

た われ  
誰そ我に

う  
ピストルにても撃てよかし  
伊藤のごとく死にて見せなむ

やとばかり

かつら さ  
桂 首相に手とられし夢みて覚めぬ  
秋の夜の二時

煙

—

やまひ

病のごと

しきやう

わ

思郷のこころ湧く日なり

けむり

目にあをぞらの煙かなしも

おの

己が名をほのかに呼びて

涙せし

じふし

すべ

十四の春にかへる術なし

青空に消えゆく煙

さびしくも消えゆく煙

われにし似るか

しやしやう

かの旅の汽車の車掌が

ゆくりなくも

我が中学の友なりしかな

ポンプ

ほとばしる唧筒の水の

ここち

心地よさよ

しばしは若きころもて見る

せ

師も友も知らで責めにき

なぞ

謎に似る

もと

わが学業のおこたりの因

に

教室の窓より遁げて

ただ一人

しろあと

かの城址に寝に行きしかな

こずかた

不来方のお城の草に寝ころびて

空に吸はれし

じふご

十五の心

かなしみといはばいふべき

<sup>あぢ</sup>  
物の味

<sup>な</sup>  
我の嘗めしはあまりに早かり

<sup>あふ</sup>  
晴れし空 仰げばいつも

口笛を吹きたくなりて

吹きてあそびき

夜寝ても口笛吹きぬ

口笛は

十五の我の歌にしありけり

<sup>しか</sup>  
よく叱る師ありき

<sup>ひげ</sup> <sup>やぎ</sup>  
髯の似たるより山羊と名づけて

口真似もしき

<sup>とも</sup>  
われと共に

小鳥に石を投げて遊ぶ

<sup>こうびたいゐ</sup>  
後備大尉の子もありしかな

<sup>しろあと</sup>  
城址の

<sup>こしか</sup>  
石に腰掛け

<sup>こ</sup> <sup>み</sup> <sup>あぢは</sup>  
禁制の木の実をひとり 味 ひしこと

<sup>のち</sup>  
その後 我を捨てし友も

<sup>ふみよ</sup>  
あの頃は共に書読み

ともに遊びき

<sup>としよぐら</sup>  
学校の図書館の裏の秋の草

<sup>き</sup>  
黄なる花咲きし

今も名知らず

花散れば

<sup>ま</sup> <sup>ふくき</sup> <sup>いへい</sup>  
先づ人さきに白の服着て家出づる

我にてありしか



今は亡き姉の恋人のおとうとと  
なかよくせしを  
かなしと思ふ

は  
夏休み果ててそのまま  
こ  
かへり来ぬ  
若き英語の教師もありき

い  
ストライキ思ひ出でも  
は をど  
今は早や吾が血躍らず  
さび  
ひそかに淋し

もりをか  
盛岡の中学校の  
バルコン  
露台の  
てすり もいちど よ  
欄干に最一度我を倚らしめ

神有りと言ひ張る友を  
と  
説きふせし  
みちばた くり き もと  
かの路傍の栗の樹の下

西風に  
うちまるおほぢ  
内丸大路の桜の葉  
ふ  
かさこそ散るを踏みてあそびき

しよ  
そのかみの愛読の書よ  
おほかた  
大方は  
はや  
今は流行らずなりにけるかな

石ひとつ  
坂をくだるがごとくにも  
我けふの日に到り着きたる

うれ せうねん うらや  
愁ひある少年の眼に羨みき  
小鳥の飛ぶを  
飛びてうた心を

ふわけ  
解剖せし  
みみず  
蚯蚓のいのちもかなしかり  
もくさくもと  
かの校庭の木柵の下

よく  
かぎりなき知識の慾に燃ゆる眼を  
いた  
姉は傷みき  
人恋ふるかと

そほうしよすす  
蘇峯の書を我に薦めし友早く  
かうしりぞ  
校を退きぬ  
まづしさのため

おどけたる手つきをかしと  
我のみはいつも笑ひき  
博学の師を

しさい  
自が才に身をあやまちし人のこと  
かたりきかせし  
師もありしかな

そのかみの学校一のなまけ者  
まじめ  
今は真面目に  
をはたらきて居り

みなか  
田舎めく旅の姿を  
みかさ  
三日ばかり都に曝し  
かへる友かな

ばらじま  
茨島の松の並木の街道を  
をとめ  
われと行きし少女  
さい  
才をたのみき

めがね  
眼を病みて黒き眼鏡をかけし頃  
その頃よ  
一人泣くをおぼえし

わがこころ  
けふもひそかに泣かむとす  
おの  
友みな己が道をあゆめり

さき  
先んじて恋のあまさと  
かなしさを知りし我なり  
お  
先んじて老ゆ

きようきた  
興 来れば  
た ふ  
友なみだ垂れ手を揮りて  
あひどれ  
酔漢のごとくなりて語りき

く  
人ごみの中をわけ来る  
わが友の  
ふと つゑ  
むかしながらの太き杖かな

ふみ  
見よげなる年賀の文を書く人と  
おもひ過ぎにき  
みとせ  
三年ばかりは

夢さめてふっと悲しむ  
わが眠り  
昔のごとく安からぬかな

しうさい  
そのむかし秀才の名の高かりし  
らう  
友牢にあり  
秋のかぜ吹く

ちかめ  
近眼にて  
い  
おどけし歌をよみ出でし  
しげを  
茂雄の恋もかなしかりしか

わが妻のむかしの願ひ  
音楽のことにかかりき  
今はうたはず

あるひしはう ゆ  
友はみな或日四方に散り行きぬ

のちやとせ  
その後八年

なあ  
名挙げしもなし

わが恋を

はじめて友にうち明けし夜のことなど

い  
思ひ出づる日

たこ  
糸切れし紙鳶のごとくに

若き日の心かろくも

とびさりしかな

二

なまり  
ふるさとの 訛 なつかし

ていしやば  
停車場の人ごみの中に

き  
そを聴きにゆく

けもの  
やまひある 獣のごとき

わがこころ

ふるさとのこと聞けばおとなし

ふと思ふ

ひごと き すずめ  
ふるさとにみて日毎聴きし 雀の鳴くを

みとせ  
三年聴かざり

な  
亡くなれる師がその昔

たまひたる

地理の本など取りいでて見る

その昔

まさやね まり  
小学校の柱屋根に我が投げし鞠

いかにかなりけむ

ふるさとの

みちばた  
かの路傍のすて石よ

今年も草に<sup>うづ</sup>埋もれしらむ

わかれをれば<sup>いもと</sup>妹いとしも

<sup>を</sup>赤き緒の

<sup>げた</sup>下駄など<sup>ほ</sup>欲しとわめく子なりし

<sup>ふつか</sup>二日前に山<sup>ゑ</sup>の絵見しが

<sup>けさ</sup>今朝になりて

にはかに恋しふるさとの山

<sup>あめうり</sup>飴売<sup>き</sup>のチャルメラ聴けば

うしなひし

をさなき心ひろへるごとし

このごろは

<sup>ときどき</sup>母も時時ふるさとのことを<sup>い</sup>言ひ出づ

<sup>い</sup>秋に入れるなり

それとなく

<sup>くに</sup>郷里のことなど語り出でて

<sup>よ</sup>秋の夜に焼く<sup>もち</sup>餅のほひかな

<sup>しぶたみむら</sup>かにかくに<sup>い</sup>渋民村は恋しかり

おもひでの山

おもひでの川

<sup>はた</sup>田も畑も売りて酒のみ

ほろびゆくふるさと<sup>びと</sup>の人に

心寄する日

あはれかの<sup>い</sup>私の教へし

<sup>こら</sup>子等もまた

やがてふるさとを<sup>す</sup>棄てて<sup>い</sup>出づるらむ

ふるさとを<sup>い</sup>出で<sup>き</sup>来し子等の

あいあ  
相会ひて

よろこぶにまさるかなしみはなし

石をもて追はるるごとく

ふるさとを出でしいかなしみ

消ゆる時なし

やはらかに柳あをめる

きたかみ きしべ

北上の岸辺目に見ゆ

泣けとごとくに

ふるさとの

そんい くしまき  
村医の妻のつつましき 櫛巻なども

なつかしきかな

かの村の登記所とうきしよに来て

はいや  
肺病みて

間もなく死にし男もありき

小学の首席を我とあらそ争ひし

友のいとなむ

きちんやど  
木賃宿かな

ちよぢら ちやう  
千代治等も長じて恋し

あ  
子を挙げぬ

わが旅にしてなせしごとくに

ある年の盆ぼんの祭に

きぬか  
衣貸さむ踊れと言ひし

女を思ふ

うすのろの兄と

かたは さんた  
不具の父もてる三太はかなし

よる ふみよ  
夜も書読む

我と共に

くりげ こうま  
栗毛の仔馬走らせし  
ぬすみぐせ  
母の無き子の 盗癖 かな

おほがた ひふ  
大形の被布の模様の赤き花  
今も目に見ゆ  
むつ  
六歳の日の恋

その名さへ忘れし頃  
へうぜん  
飄然 とふるさとに来て  
せき  
咳 せし男

いちわる だいく  
意地悪の大工の子などもかなしかり  
いくさ い  
戦 に出でしが  
生きてかへらず

肺を病む  
ごくだうちぬし そうりやう  
極道地主の 総領 の  
らい  
よめとりの日の春の雷 かな

そうじろ  
宗次郎に  
くど を  
おかねが泣きて口説き居り  
だいこん  
大根の花白きゆふぐれ

せうしん  
小心の役場の書記の  
ふ うはさ  
気の狂れし 噂 に立てる  
ふるさとの秋

いとこ  
わが従兄  
かり あ のち  
野山の猫に飽きし後  
いへ や  
酒のみ家売り病みて死にしかな

我ゆきて手をとれば  
泣きてしづまりき  
象 あば  
酔ひて荒れしそのかみの友

酒のめば

かたな お けうし  
刀をぬきて妻を逐心教師もありき  
お  
村を逐はれき

はいびやう ふ  
年ごとに肺病やみの殖えてゆく  
村に迎へし  
若き医者かな

がり  
ほたる狩  
川にゆかむといふ我を  
やまぢ  
山路にさそふ人にてありき

ばれいしよ ふ  
馬鈴薯のうす紫の花に降る  
雨を思へり  
みやこ  
都の雨に

あはれ我がノスタルジヤは  
きん  
金のごと  
心に照れり清くしみに

友として遊ぶものなき  
しやうわる こら  
性悪の巡查の子等も  
あはれなりけり

かんこどり  
閑古鳥  
おこ  
鳴く日となれば起るてふ  
友のやまひのいかになりけむ

わが思ふこと  
ただ  
おほかたは正しかり  
つ あした  
ふるさとのたより着ける朝は

今日聞けば  
さち びと  
かの幸うすきやもめ人  
い  
きたなき恋に身を入るるてふ



わがために  
なやめる<sup>たま</sup>魂をしづめよと  
讚美歌うた心人ありしかな

あはれかの男のごときたましひよ  
今は何処に<sup>いづこ</sup>  
何を思ふや

わが庭の白き躑躅を<sup>つつじ</sup>  
うすづき<sup>よ</sup>薄月の夜に  
を  
折りゆきしことな忘れそ

わが村に  
初めてイエス・クリストの道<sup>と</sup>を説きたる  
若き女かな

霧<sup>かうま</sup>ふかき好摩<sup>はら</sup>の原の  
停車場の  
朝の虫こそすずろなりけれ

汽車の窓  
はるかに北にふるさとの山見え来れば<sup>く</sup>  
襟<sup>えり</sup>を<sup>ただ</sup>正すも

ふるさとの土をわが踏めば  
何がなしに足<sup>かる</sup>軽くなり  
心<sup>おも</sup>重れり

ふるさとに入りて先づ心<sup>いた</sup>傷むかな  
道広くなり  
橋もあたらし

見もしらぬ<sup>をんなけうし</sup>女教師が  
そのかみの  
わが<sup>まなびや</sup>学舎の窓に立てるかな

いへ  
かの家のかの窓にこそ  
よ  
春の夜を  
ひでこ かはづき  
秀子とともに 蛙 聴きけれ

しんどう  
そのかみの 神童 の名の  
かなしさよ  
ふるさとに来て泣くはそのこと

ていしやばみち  
ふるさとの 停車場路の  
川ばたの  
くるみ ひろ  
胡桃の下に小石拾へり

ふるさとの山に向ひて  
言ふことなし  
ふるさとの山はありがたきかな

秋風のころよさに

とほ  
ふるさとの空遠みかも  
たか や  
高き屋にひとりのぼりて  
うれ くだ  
愁ひて下る

かう せうじん  
皎として玉をあざむく 小人も  
あきく  
秋来といふに  
物を思へり

かなしきは  
秋風ぞかし  
まれ わ しじ  
稀にのみ湧きし涙の繁に流るる

す  
青に透く  
まくら  
かなしみの玉に 枕して  
き  
松のひびきを夜もすがら聴く

さ ななやま  
神寂びし 七山の杉  
い  
火のごとく染めて日入りぬ  
静かなるかな

そを読めば  
うれ ふみた  
愁ひ知るといふ書焚ける  
びと  
いにしへ人の心よろしも

ものなべてうらはかなげに  
暮れゆきぬ  
とりあつめたる悲しみの日は

みづたまり  
水潦  
ひも  
暮れゆく空とくれなるの紐を浮べぬ  
あきさめ のち  
秋雨の後

秋立つは水にかも似る

あら  
洗はれて  
思ひことごと新しくなる

うれ  
愁ひ来て  
丘にのぼれば  
名も知らぬ鳥 啄<sup>ついで</sup> めり赤き茨<sup>ばら</sup>の実<sup>み</sup>

つじ  
秋の辻  
よ<sup>よ</sup> みち<sup>みち</sup>  
四すぢの路の三すぢへと吹きゆく風の  
あと見えずかも

い  
秋の声まづいち早く耳に入る  
さが  
かかる性持つ  
かなしむべかり

く  
目になれし山にはあれど  
秋来れば  
神や住まむとかしこみて見る

な つ  
わが為さむこと世に尽きて  
長き日を  
かくしもあはれ物を思ふか

きた  
さらさらと雨落ち来り  
もぬ  
庭の面の濡れゆくを見て  
涙わすれぬ

みらう  
ふるさとの寺の御廊に  
ふ  
踏みにける  
をぐし てふ  
小櫛の蝶を夢にみしかな

こころみに  
いとけなき日の我となり  
物言ひてみむ人あれと思ふ

きび  
はたはたと黍の葉鳴れる

のきば  
ふるさとの軒端なつかし  
秋風吹けば

す  
摩れあへる肩のひまより  
はつかにも見きといふさへ  
にき  
日記に残れり

みやびを  
風流男は今も昔も  
あわゆき  
泡雪の  
たまで ま よ お  
玉手さし捲く夜にし老ゆらし

かりそめに忘れても見まし  
石だたみ  
お うも  
春生ふる草に埋るるがごと

ゆりかご  
その昔 揺籃 に寝て  
あまたたび夢にみし人か  
せち  
切になつかし

かみなづき  
神無月  
いはて  
岩手の山の  
まゆ  
初雪の眉にせまりし朝を思ひぬ

ひでり雨さらさら落ちて  
せんざい  
前裁の  
はぎ みだ  
萩のすこしく乱れたるかな

くわくれう  
秋の空 廓寥 として影もなし  
あまりにさびし  
からす  
烏 など飛べ

うご  
雨後の月  
ぬ やねがはら  
ほどよく濡れし屋根瓦の  
そのところどころ光るかなしさ

われ<sup>う</sup>餓えてある日に  
細き尾<sup>ふ</sup>を掉りて  
餓えて我を見る犬の面<sup>つら</sup>よし

いつしかに  
泣くといふこと忘れたる  
我泣かしむる人のあらしか

わうぜん  
汪汪として  
ああ酒のかなしみぞ我<sup>きた</sup>に来れる  
立ちて舞<sup>ま</sup>ひなむ

いとどな  
蟬鳴く  
そのかたはらの石<sup>きよ</sup>に踞し  
泣き笑ひしてひとり物言ふ

力<sup>や</sup>なく病<sup>ころ</sup>みし頃より  
口<sup>あ</sup>すこし開<sup>ねむ</sup>きて眠るが  
癖<sup>くせ</sup>となりにき

人<sup>う</sup>ひとり得るに過ぎざる事をもて  
大願<sup>たいぐわん</sup>とせし  
若きあやまち

物<sup>ゑ</sup>怨ずる  
そのやはらかき上目<sup>うはめ</sup>をば  
愛<sup>め</sup>づとことさらつれなくせむや

かくばかり熱<sup>あつ</sup>き涙は  
初恋の日にもありきと  
泣く日またなし

長く長く忘れし友に  
会ふごとき  
よろこびをもて水の音<sup>き</sup>聴く

秋の夜の

はがね  
鋼鉄の色の天空に

は  
火を噴く山もあれなど思ふ

いはてやま  
岩手山

さんぼう  
秋はふもとの三方の

なに  
野に満つる虫を何と聴くらむ

父のごと秋はいかめし

母のごと秋はなつかし

いへ こ  
家持たぬ児に

く  
秋来れば

こ  
恋ふる心のいとまなさよ

よ ね かり  
夜もい寝がてに雁多く聴く

ながつき なか  
長月も半ばになりぬ

いつまでか

うちい  
かくも幼く打出でずあらむ

思ふてふこと言はぬ人の

き  
おくり来し

ぐさ  
忘れな草もいちじろかりし

さかぞ ゆみ  
秋の雨に逆反りやすき弓のごと

このごろ

君のしたしまぬかな

よひる  
松の風夜昼ひびきぬ

と ほこら  
人訪はぬ山の祠の

いしうま  
石馬の耳に

くちき かを  
ほのかなる朽木の香り

たけ  
そがなかの蕈の香りに

秋やや深し

しぐれ  
時雨降るとき音して  
こづた  
木伝ひぬ

人によく似し森の猿さるども

森の奥

遠きひびきす

き うす しゆじゆ き  
木のうろに白ひく侏儒の国にかも来し

世のはじめ

まづ森ありて

はんしん  
半神の人そが中に火や守りけむ

はてもなく砂うちつづく

ゴビ  
戈壁の野に住みたまふ神は

秋の神かも

あめつちに

げつくわう  
わが悲しみと月光と

よ  
あまねき秋の夜となれりけり

うらがなしき

よる ねも く  
夜の物の音洩れ来るを

ひろ ゆ  
拾ふがごとくさまよひ行きぬ

旅の子の

き  
ふるさとに来て眠るがに

き  
げに静かにも冬の来しかな



忘れがたき人人

—

しほ はまべ  
潮かをる北の浜辺の  
はまなす  
砂山のかの浜薔薇よ  
今年も咲けるや

たのみつる年の若さを<sup>かぞ</sup>数へみて  
指を見つめて  
旅がいやになりき

みたび  
三度ほど  
汽車の窓よりながめたる町の名なども  
したしかりけり

はこだて とこや でし  
函館の床屋の弟子を  
い  
おもひ出でぬ  
そ  
耳剃らせるがこころよかりし

わがあとを追ひ<sup>き</sup>来て  
知れる人もなき  
へんど  
辺土に住みし母と妻かな

ゑ  
船に酔ひてやさしくなれる  
め  
いもうとの眼見ゆ  
つがる  
津軽の海を思へば

と  
目を閉ぢて  
しやうしん ず  
傷心の句を誦してゐし  
友の手紙のおどけ悲しも

をさなき時  
らんかん くそぬ  
橋の欄干に糞塗りし  
話も友はかなしみてしき

しやうがい  
おそらくは 生涯 妻をむかへじと  
わらひし友よ  
今もめとらず

あはれかの  
めがね ふち  
眼鏡の縁をさびしげに光らせてゐし  
女教師よ

めし  
友われに飯を与へき  
そむ  
その友に背きし私の  
さが  
性のかなしさ

はこだて あをやなぎちやう  
函館の 青柳町 こそかなしけれ  
こひうた  
友の恋歌  
矢ぐるまの花

ふるさとの  
なつ  
麦のかをりを懐かしむ  
まゆ  
女の眉にこころひかれき

あたらしき洋書の紙の  
か  
香をかぎて  
いちづ かね ほ  
一途に金を欲しと思ひしが

さわ  
しらなみの寄せて騒げる  
おほもりはま  
函館の 大森浜 に  
思ひしことども

朝な朝な  
しな そくか い  
支那の俗歌をうたひ出づる  
め  
まくら時計を愛でしかなしみ

へうはく うれ じよ な  
漂泊の愁ひを叙して成らざりし  
さうかう  
草稿の字の  
読みがたさかな

いくたびか死なむとしては  
死なざりし  
わが来しかたのをかしく悲し

ぐわぎう やま はんぶく  
函館の臥牛の山の半腹の  
ひ からうた  
碑の漢詩も  
なかば忘れぬ

むやむやと  
うち つぶや  
口の中にてたふとげの事を 呟く  
こじき  
乞食もありき

とるに足らぬ男と思へと言ふごとく  
い  
山に入りనికి  
神のごとき友

まきたばこ  
巻煙草口にくはへて  
なみ  
浪あらき  
いそ  
磯の夜霧に立ちし女よ

演習のひまにわざわざ  
汽車に乗りて  
と き  
訪ひ来し友とのめる酒かな

おほかは おもて  
大川の水の面を見るごとに  
いくう  
郁雨よ  
君のなやみを思ふ

ちゑ じひ  
智慧とその深き慈悲とを  
もちあぐみ  
な  
為すこともなく友は遊べり

え  
こころざし得ぬ人人の  
あつまりて酒のむ場所が  
我が家なりしかな

かなしめば高く笑ひき  
酒をもて  
もん げ  
悶を解すといふ年上の友

若くして  
すにん  
数人の父となりし友  
子なきがごとく酔へばうたひき

さりげなき高き笑ひが  
酒とともに  
はらわた し  
我が腸に沁みにけらしな

あくび か  
吐呻嘆み  
夜汽車の窓に別れたる  
ものた  
別れが今は物足らぬかな

雨に濡れし夜汽車の窓に  
うつ  
映りたる  
やまあひ  
山間の町のともしびの色

雨つよく降る夜の汽車の  
しづく  
たえまなく雫流るる  
まどガラス  
窓硝子かな

真夜中の  
くちあんえき お  
俱知安駅に下りゆきし  
びん きず  
女の鬢の古き痕あと

さつぼろ  
札幌に  
かの秋われの持てゆきし  
しかして今も持てるかなしみ

なみき  
アカシヤの街樾にポプラに  
秋の風  
にき  
吹くがかなしと日記に残れり

しんとして幅広き<sup>まち</sup>街の  
秋の夜の  
たうもろこし  
玉蜀黍の焼くるにほひよ

わが宿の姉と妹<sup>いもと</sup>のいさかひに  
しよや  
初夜過ぎゆきし  
札幌の雨

いしかり <sup>びくに</sup>  
石狩の美国といへる停車場の  
さく <sup>ほ</sup>  
柵に乾してありし  
きれ  
赤き布片かな

かなしきは<sup>をたる</sup>小樽の町よ  
歌ふことなき人人の  
声の荒さよ

泣くがごと首ふるはせて  
さう  
手の相を見せよといひし  
えきしや  
易者もありき

いささかの<sup>ぜにか</sup>銭借りてゆきし  
わが友の  
うしろすがた <sup>かた</sup>  
後姿の肩の雪かな

世わたりの<sup>つたな</sup>拙きことを  
ひそかにも  
ほこ  
誇りとしたる我にやはあらぬ

な <sup>や</sup>  
汝が瘦せしからだはすべて  
むほんぎ  
謀叛気のかたまりなりと  
いはれてしこと

かの年のかの新聞の  
初雪の記事を書きしは  
我なりしかな

いす う みがま  
椅子をもて我を撃たむと身構へし

ゑ  
かの友の酔ひも

さ  
今は醒めつらむ

負けたるも我にてありき

もと  
あらそひの因も我なりしと

今は思へり

なく  
殴らむといふに

殴れとつめよせし

昔の我のいとほしきかな

なれみたび

汝三度

のど けん ぎ  
この咽喉に剣を擬したりと

かれこくべつ じ  
彼告別の辞に言へりけり

あらそひて

にく  
いたく憎みて別れたる

き  
友をなつかしく思ふ日も来ぬ

まゆ ひい  
あはれかの眉の秀でし少年よ

弟と呼べば

ゑ  
はつかに笑みしが

ぬ  
わが妻に着物縫はせし友ありし

く  
冬早く来る

植民地かな

ひらて  
平手もて

ふぶき ふ  
吹雪にぬれし顔を拭く

友共産を主義とせりけり

おに  
酒のめば鬼のごとくに青かりし

大いなる顔よ

かなしき顔よ

からふと い  
樺太 に入りて

新しき宗教を創めむといふ<sup>はじ</sup>  
友なりしかな

をさ ことな  
治まれる世の事無さに  
あ  
飽きたりといひし頃こそ  
かなしかりけれ

共同の薬屋開き

まう  
儲けむといふ友なりき  
さぎ  
詐欺せしといふ

あをじろき<sup>ほほ</sup>頬に涙を光らせて  
死をば語りき  
あきびと  
若き 商人

お  
子を負ひて  
い  
雪の吹き入る停車場に  
まゆ  
われ見送りし妻の眉かな

敵として憎みし友と  
にぎ  
やや長く手をば握りき  
わかれといふに

い  
ゆるぎ出づる汽車の窓より  
ひとさき  
人先に顔を引きしも  
ま  
負けざらむため

みぞれ降る  
いしかり  
石狩の野の汽車に読みし  
ツルゲエネフの物語かな

のち うはさ  
わが去れる後の噂を

おもひやる<sup>たびで</sup>旅出はかなし  
死ににゆくごと

わかれ来てふと<sup>またた</sup>瞬<sup>き</sup>けば  
ゆくりなく  
つめたきものの頬をつたへり

忘れ来し煙草<sup>き たばこ</sup>を思ふ  
ゆけどゆけど  
山なほ遠き雪の野の汽車

うす紅<sup>あか</sup>く雪に流れて  
いりひかげ  
入日影  
あらの<sup>てら</sup>曠野の汽車の窓を照せり

腹すこし<sup>いた い</sup>痛み出でしを  
しのびつつ  
ちやうろ<sup>たばこ</sup>長路の汽車にのむ煙草かな

のりあひ<sup>ほうへいしくわん</sup>乗合の砲兵士官の  
さや  
劍の鞘  
がちやりと鳴るに思ひやぶれき

名のみ知りて<sup>えん</sup>縁もゆかりもなき土地の  
やどや  
宿屋安けし  
いへ  
我が家のごと

つれ  
伴なりしかの代議士の  
ねがほ  
口あける青き寐顔を  
かなしと思ひき

今夜こそ思ふ<sup>ぞんぶん</sup>存分泣いてみむと  
とま  
泊りし宿屋の  
茶のぬるさかな



水蒸気

列車の窓に花のごと凍<sup>い</sup>てしを染<sup>そ</sup>むる  
あかつきの色

ごおと鳴る 凧<sup>こがらし</sup>のあと  
乾<sup>かわ</sup>きたる雪舞ひ立ちて  
林<sup>つつ</sup>を包めり

そらちがは うも  
空知川雪に埋れて  
鳥も見えず  
岸<sup>きしべ</sup>辺の林に人ひとりゐき

せきばく  
寂莫を敵とし友とし  
雪のなかに  
長き一生を送る人もあり

いたく汽車に疲れて猶<sup>なほ</sup>も  
きれぎれに思ふは  
我のいとしさなりき

うたふごと駅の名呼びし  
柔<sup>にうわ</sup>和なる  
若<sup>えきふ</sup>き駅夫の眼をも忘れず

雪のなか  
処<sup>しよしよ</sup>処に屋根見えて  
煙<sup>えんとつ</sup>突の煙<sup>けむり</sup> うすくも空にまよへり

遠くより  
笛<sup>ふえ</sup>ながながとひびかせて  
汽車今とある森林<sup>い</sup>に入る

何事も思ふことなく  
日<sup>ひいちにち</sup>一日  
汽車のひびきに心まかせぬ

さいはての駅に<sup>お</sup>下り立ち  
雪あかり

さびしき町にあゆみ入りに<sup>い</sup>き

しらしらと氷かがやき  
千鳥なく

<sup>くしろ</sup>  
釧路の海の冬の月かな

こほりたるインクの<sup>びん</sup>罎を

<sup>かざ</sup>  
火に翳し

涙ながれぬともし<sup>もと</sup>びの下

顔とこゑ

そのみ昔に<sup>はて</sup>変らざる友にも会ひき

国の果<sup>はて</sup>にて

あはれかの国のはてにて

酒のみき

かなしみの<sup>をり</sup>滓<sup>すす</sup>を啜るごとくに

酒のめば<sup>わ</sup>悲しみ一時に<sup>く</sup>湧き来るを

<sup>ね</sup>  
寐て夢みぬを

うれしとはせし

<sup>だ</sup>  
出しぬけの女の笑ひ

<sup>し</sup>  
身に沁みき

<sup>くりや</sup> 厨 <sup>こほ</sup>に酒の凍る真夜中

<sup>ゑ</sup>  
わが酔ひに心いためて

うたはざる女ありしが

いかになれるや

<sup>こやつこ</sup>  
小奴といひし女の

やはらかき

<sup>みみたぼ</sup>  
耳朶なども忘れがたかり

よりそひて

しんや  
深夜の雪の中に立つ

めて  
女の右手のあたたかさかな

死にたくはないかと言へば

これ見よと

のんど きず  
咽喉の痕を見せし女かな

げいごと  
芸事も顔も

すぐ  
かれより優れたる

女あしざまに我を言へりとか

ま  
舞へといへば立ちて舞ひにき

おのづから

あくしゆ ゑ  
悪酒の酔ひにたふるるまでも

ゑ  
死ぬばかり我が酔心をまちて

いろいろの

ささや  
かなしきことを囁きし人

いかにせしと言へば

ゑ  
あをじろき酔ひざめの

おもて し ゑ  
面に強ひて笑みをつくりき

かなしきは

しらたま  
かの白玉のごとくなる腕に残せし

あと  
キスの痕かな

ゑ  
酔ひてわがうつむく時も

め  
水ほしと眼ひらく時も

呼びし名なりけり

火をした心虫のごとくに

いへ  
ともしびの明るき家に

な  
かよひ慣れにき

きしきしと寒さに踏めば<sup>いたきし</sup>板 軋む  
かへりの廊下の  
不意のくちづけ

その膝に<sup>ひざ まくら</sup>枕 しつつも  
我がこころ  
思ひしはみな我のことなり

さらさらと氷の<sup>くづ</sup>屑が  
波に鳴る  
磯の月夜のゆきかへりかな

死にしとかこのごろ聞きぬ  
恋がたき  
<sup>さい</sup>才あまりある男なりしが

十年まへに作りしといふ<sup>からうた</sup>漢詩を  
<sup>ゑ とな</sup>酔へば唱へき  
<sup>お</sup>旅に老いし友

吸ふごとに  
鼻が<sup>こほ</sup>びたりと凍りつく  
寒き空気を吸ひたくなりぬ

波もなき二月の<sup>わん</sup>湾に  
<sup>しろぬり</sup>白塗の  
外国船が低く浮かべり

三味線の<sup>いと</sup>絃のきれしを  
火事のごと騒ぐ子ありき  
大雪の<sup>よ</sup>夜に

神のごと  
遠く姿をあらはせる  
阿寒<sup>あかん</sup>の山の雪のあけぼの

くに  
郷里にゐて  
身投げせしことありといふ  
さみ  
女の三味にうたへるゆふべ

えびいろ  
葡萄色の  
古き手帳にのこりたる  
あひびき ところ  
かの 会合 の時と 処 かな

たび は  
よごれたる足袋穿く時の  
きみ  
気味わるき思ひに似たる  
おもひで  
思出 もあり

へや  
わが室に女泣きしを  
小説のなかの事かと  
い  
おもひ出づる日

らうたうさ  
浪淘沙  
ながくも声をふるはせて  
うたふがごとき旅なりしかな

いつなりけむ

夢にふと聴ききてうれしかりし  
その声もあはれ長く聴かざり

ほ  
頬の寒き

りうり  
流離の旅の人として

みちと  
路問ふほどのこと言ひしのみ

さりげなく言ひし言葉は  
さりげなく君も聴きつらむ  
それだけのこと

ひややかに清なめいしき大理石に  
春の日の静かに照るは  
かかる思ひならむ

世の中の明るさのみを吸ふごとき  
ひとみ  
黒き瞳の  
今も目にあり

かの時に言ひそびれたる  
大切な言葉は今も  
胸にのけれど

ましろ                      かさ  
真白なるランプの笠の

きず  
瑕のごと

流離の記憶消しがたきかな

はこだて                      やけあと                      よ  
函館のかの焼跡を去りし夜の  
こころ残りを  
今も残しつ

人がいふ

びん  
鬢のほつれのめでたさを

物書く時の君に見たりし

ばれいしよ  
馬鈴薯の花咲く頃と  
なれりけり  
君もこの花を好きたまふらむ

山の子の  
山を思ふがごとくにも  
かなしき時は君を思へり

忘れをれば  
ひよっとした事が思ひ出の種たねにまたなる  
忘れかねつも

や  
病むと聞き  
い  
癒えしと聞きて  
しひやくり  
四百里のこなたに我はうつつなかりし

君に似し姿を街まちに見る時の  
こころ躍りをどを  
あはれと思へ

かの声を最一度聴かばもいちどき  
すっきりと  
胸はや霽れむと今朝けさも思へる

いそがしき生活くらしのなかの  
ときおり  
時折のこの物おもひ  
たれ  
誰のためぞも

しみじみと  
物うち語る友もあれ  
君のことなど語り出いでなむ

死ぬまでに一度会はむと  
言ひやらば  
君もかすかにうなづくらむか

時として

君を思へば  
安かりし心にはかに騒ぐかなしき

わかきれとし来て年を重ねて  
年としごとに恋しくなれる  
君にしあるかな

いしかり みやこ  
石狩の都の外の  
君が家  
りんご  
林檎の花の散りてやあらむ

長ふみき文  
三みとせ年のうちに三みたびき度来ぬ  
我の書よたびきしは四度にかあらむ

手套を脱ぐ時

てぶくろ ぬ や  
手套を脱ぐ手心と休む  
何やらむ  
こころかすめし思ひ出のあり

いつしかに  
じやう  
情をいつはること知りぬ  
ひげ  
髭を立てしもその頃なりけむ

朝の湯の  
ゆぶね の  
湯槽のふちにうなじ載せ  
いき  
ゆるく息する物思ひかな

く  
夏来れば  
うがひ薬の  
やまひ し  
病ある齒に沁む朝のうれしかりけり

つくづくと手をながめつつ  
おもひ出いでぬ  
キスじやうずが上手の女なりしが



さびしきは  
色にしたしまぬ目のゆゑと  
赤き花など買はせけるかな

新しき本を買ひ来て読む夜半の<sup>よは</sup>  
そのたのしさも  
長くわすれぬ

たびなのか  
旅七日  
かへり来ぬれば<sup>き</sup>  
わが窓の赤きインクの染みもなつかし<sup>し</sup>

こもんじよ  
古文書のなかに見いでし  
よごれたる  
すひとりがみ  
吸取紙をなつかしむかな

手にためし雪の融くるが<sup>と</sup>  
ここちよく  
わが寐飽きたる心には沁む<sup>し</sup>  
<sup>ねあ</sup>

薄れゆく障子の日影<sup>しやうじ ひかげ</sup>  
そを見つつ  
ころろいつしか暗くなりゆく

ひやひやと  
夜は薬の香のほふ<sup>か</sup>  
医者が住みたるあとの家かな<sup>いへ</sup>

まどガラス  
窓硝子  
ちりと雨とに曇りたる窓硝子にも<sup>くも</sup>  
かなしみはあり

むとせ ひごとひごと  
六年ほど日毎日毎にかぶりたる  
古き帽子も  
す  
棄てられぬかな

こころよく  
春のねむりをむさぼれる  
目にやはらかき庭の草かな

あかれんぐわ たかべい  
赤煉瓦 遠くつづける 高塀の  
むらさきに見えて  
春の日ながし

春の雪  
銀座の裏の三階の煉瓦 造づくりに  
やはらかに降る

よごれたる煉瓦の壁に  
降りとて融け降りては融くる  
春の雪かな

目を病めるや  
若き女の倚りかかるよ  
窓にしめやかに春の雨降る

あたらしき木のかをりなど  
ただよへる  
しんかいまち  
新開町の春の静けさ

春の街まち  
見よげに書ける 女名をんなの  
かどふだ  
門札などを読みありくかな

そことなく  
みかん  
蜜柑の皮の焼くるときにほひ残りて  
ゆふべ  
夕 となりぬ

にぎはしき若き女の 集会あつまりの  
こゑき聴ききう倦うみて  
さびしくなりたり

どこ  
何処やらに

若き女の死ぬごときなや悩ましきあり

みぞれ  
春の霰 降る

氣  
コニヤックの酔ひのあとなる

やはらかき

このかなしみのすずろなるかな

さら  
白き皿

ふ たな かさ  
拭きては棚に重ねゐる

すみ  
酒場の隅のかなしき女

おほぢ  
乾きたる冬の大路の

いづく  
何処やらむ

せきたんさん  
石炭酸 のにほひひそめり

あかあか いりひ  
赤赤 と入日うつれる

河ばたの酒場の窓の

白き顔かな

さら  
新しきサラダの皿の

す  
酢のかをり

し ゆふべ  
こころに沁みてかなしき 夕

そらいろ びん  
空色の罎より

やぎ  
山羊の乳をつぐ

手のふるひなどいとしかりけり

すがた見の

いき  
息のくもりに消されたる

氣 まみ  
酔ひうるみの眸のかなしさ

ひとしきり静かになれる

ゆふぐれの

くりや

厨にのこるハムのにほひかな

ひややかにびん鑊たなのならべる棚の前

は  
齒せせる女を

かなしとも見き

やや長きキスをかは交きして別れ来し

深夜の街の

遠き火事かな

病院の窓のゆふべの

<sup>じろ</sup>  
ほの白き顔にありたる  
<sup>あは みおぼ</sup>  
淡き見覚え

<sup>いつ</sup>  
何時なりしか

<sup>おほかは いうせん</sup>  
かの大川の遊船に  
<sup>ま で</sup>  
舞ひし女をおもひ出にけり

<sup>ふみ</sup>  
用もなき文など長く書きさして  
ふと人こひし  
<sup>で</sup>  
街に出てゆく

<sup>たばこ</sup>  
しめらへる煙草を吸へば  
おほよその  
<sup>かる</sup>  
わが思ふことも軽くしめれり

するどくも

<sup>きた</sup>  
夏の来るを感じつつ  
<sup>うご こには か か</sup>  
雨後の小庭の土の香を嗅ぐ

<sup>かさ</sup>  
すずしげに飾り立てたる  
<sup>ガラスや</sup>  
硝子屋の前にながめし  
夏の夜の月

<sup>と</sup>  
君来るといふに夙く起き  
白シャツの  
<sup>そで</sup>  
袖のよごれを気にする日かな

おちつかぬ我が弟の  
このごろの  
眼のうるみなどかなしかりけり

<sup>くひ</sup>  
どこやらに杭打つ音し  
<sup>おほをけ</sup>  
大桶をころがす音し  
雪ふりいでぬ

ひとけ よ  
人気なき夜の事務室に  
けたたましく  
りん  
電話の鈴の鳴りて止みたり

目さまして  
い きた  
ややありて耳に入り来る  
真夜中すぎの話声かな

見てをれば時計とまれり  
吸はるごと  
ゆ  
心はまたもさびしさに行く

あさあさ  
朝朝の  
しろ すみやく  
うがひの料の水薬の  
びん  
罎がつめたき秋となりにけり

なだら  
夷かに麦の青める  
丘の根の  
こみち をぐし  
小径に赤き小櫛ひろへり

すぎふ  
裏山の杉生のなかに  
まだら ひかげ は い  
斑なる日影這ひ入る  
秋のひるすぎ

港町  
とび あつ  
とろろと鳴きて輪を描く鳶を圧せる  
しほ  
潮ぐもりかな

こはるび くもりガラス  
小春日の曇硝子にうつりたる  
とりかけ  
鳥影を見て  
すずろに思ふ

ひとならび泳げるごとき  
いへいへ たかひく のき  
家家の高低の軒に  
冬の日の舞心

たきやまちやう  
京橋の 滝山町 の  
新聞社  
ひ  
灯ともる頃のいそがしさかな

いか  
よく怒る人にてありしわが父の  
いか  
日ごろ怒らず  
怒れと思ふ

い  
あさ風が電車のなかに吹き入れし  
やなぎ  
柳 のひと葉  
手にとりて見る

ゆゑもなく海が見たくて  
海に来ぬ  
いた  
こころ傷みてたへがたき日に

たひらなる海につかれて  
そむけたる  
おび  
目をかきみだす赤き帯かな

あ  
今日逢ひし町の女の  
どれもこれも  
恋にやぶれて帰るとき日

汽車の旅  
のなか  
とある野中の停車場の  
か  
夏草の香のなつかしかりき

朝まだき  
ま あ はつあき たびで  
やっと間に合ひし 初秋 の旅出の汽車の  
かた ばん  
堅き麺麭かな

かの旅の夜汽車の窓に  
おもひたる  
我がゆくすゑのかなしかりしかな

ふと見れば  
とある林の駐車場の時計とまれり  
よ  
雨の夜の汽車

き  
わかれ来て  
あかりをぐら もてあそ  
燈火小暗き夜の汽車の窓に 弄 ぶ  
りんご  
青き林檎よ

く  
いつも来る  
さかみせ  
この 酒肆 のかなしさよ  
あかあか さ い  
ゆふ日 赤赤 と酒に射し入る

はすぬま  
白き 蓮沼 に咲くごとく  
かなしみが  
ゑ  
酔ひのあひだにはっきりと浮く

かべ  
壁 ごとに  
若き女の泣くをきく  
かや  
旅の宿屋の秋の蚊帳かな

こそ あはせ  
取りいでし去年の 裕 の  
し  
なつかしきにほひ身に沁む  
はつあき  
初秋 の朝

ひざ  
気にしたる左の 膝 の痛みなど  
なほ  
いつか癒りて  
秋の風吹く

売り売りて  
てあか  
手垢きたなきドイツ語の辞書のみ残る  
夏の末かな

にく  
ゆゑもなく 憎みし友と  
いつしかに親しくなりて  
秋の暮れゆく



あかがみ <sup>てず</sup>  
赤紙の表紙手擦れし

こくきん  
国禁の

ふみ <sup>かうり</sup>  
書を行季の底にさがす日

<sup>と</sup>  
売ることを差し止められし

本の著者に

みち  
路にて会へる秋の朝かな

今日よりは

<sup>あふ</sup>  
我も酒など呷らむと思へる日より  
秋の風吹く

だいかい  
大海の

<sup>かたすみ</sup> <sup>しまじま</sup>  
その片隅につらなれる島島の上に  
秋の風吹く

うるみたる目と

<sup>ほくろ</sup>  
目の下の黒子のみ

いつも目につく友の妻かな

いつ見ても

毛糸の玉をころがして

くつした <sup>あ</sup>  
鞆を編む女なりしが

えびいろ  
葡萄色の

<sup>ながいす</sup> <sup>じろ</sup>  
長椅子の上に眠りたる猫ほの白き

秋のゆふぐれ

ほそぼそと

<sup>そこ</sup> <sup>ここ</sup>  
其処ら此処らに虫の鳴く

昼の野に来て読む手紙かな

よる <sup>く</sup>  
夜おそく戸を繰りをれば

白きもの庭を走れり

犬にやあらむ

ガラス  
夜の二時の窓の硝子を  
あか  
うす紅く  
染めて音なき火事の色かな

あはれなる恋かなと  
つぶや  
ひとり 呟 きて  
よは ひをけ すみそ  
夜半の火桶に炭添へにけり

ましろ かさ  
真白なるラムプの笠に  
手をあてて  
寒き夜にする物思ひかな

水のごと  
からだ  
身体をひたすかなしみに  
ねぎ か ゆふべ  
葱の香などのまじれる 夕

時ありて  
猫のまねなどして笑心  
みそぢ ず  
三十路の友のひとり住みかな

きよわ せきこう  
気弱なる 斥候のごとく  
おそれつつ  
深夜の街を一人散歩す

ひふ  
皮膚がみな耳にてありき  
まち  
しんとして眠れる 街の  
重き靴音

よる い  
夜おそく停車場に入り  
すわ  
立ち坐り  
い ぼう  
やがて出でゆきぬ 帽なき男

気がつけば  
お を  
しっとり夜霧下りて居り  
ながくも街をさまよへるかな

も たばこめぐ  
若しあ**ら**ば煙草恵めと  
く  
寄りて来る  
びと  
あとなし人と深夜に語る

あらの  
曠野より帰るごとくに  
き  
帰**り**来ぬ  
よ  
東京の夜をひとりあゆみて

銀行の窓の下なる  
しきいし しも  
舗石の霜にこぼれし  
青**イ**ンクかな

ちょんちょんと  
こやぶ ほほじろ  
とある小藪に**頼**白の遊ぶを眺む  
や みち  
雪の野の**路**

十月の朝の空気に  
あたらしく  
す あかんぼ  
息吸ひそめし**赤**坊のあり

十月の産病院の  
しめりたる  
長き廊下のゆきかへりかな

そでた  
むらさきの袖垂れて  
しな  
空を見上げゐる支那人ありき  
公園の午後

をさなご  
孩児の手ざはりのごとき  
思ひあり  
あゆ  
公園に来てひとり歩めば

ひさしぶりに公園に来て  
友に会ひ  
かた くちど  
堅く手握り口疾に語る

公園の木の間に  
小鳥あそべるを  
ながめてしばし憩ひけるかな

晴れし日の公園に来て  
あゆみつつ  
わがこのごろの衰へを知る

思出のかのキスかとも  
おどろきぬ  
プラタヌの葉の散りて触れしを

公園の隅のベンチに  
二度ばかり見かけし男  
このごろ見えず

公園のかなしみよ  
君の嫁ぎてより  
すでに七月来しこともなし

公園のとある木蔭の捨椅子に  
思ひあまりて  
身をば寄せたる

忘れぬ顔なりしかな  
今日街に  
捕吏にひかれて笑める男は

マチ擦れば  
二尺ばかりの明るさの  
中をよぎれる白き蛾のあり

目をとちて  
口笛かすかに吹きてみぬ  
寐られぬ夜の窓にもたれて

わが友は

今日も母なき子を負ひて

しろあと  
かの城址にさまよへるかな

よる  
夜おそく

つとめ先よりかへり来<sup>き</sup>て

今死にして心<sup>こ</sup>児<sup>だ</sup>を抱けるかな

ふたみ  
二三こゑ

いまはのきはに<sup>かす</sup>微かにも泣きしといふに

さそ  
なみだ誘はる

ましろ こ  
真白なる大根の根の肥ゆる頃

うまれて

やがて死にし児<sup>こ</sup>のあり

おそ秋の空気を

さんじやくしはう  
三尺四方ばかり

吸ひてわが児の死にゆきしかな

死にし児の

胸に注射の針を刺す

医者の手もとにあつまる心

なぞ むか  
底知れぬ謎<sup>なぞ</sup> に対ひてあるごとし

しじ  
死児のひたひに

またも手をやる

かなしみのつよくいたらぬ

さびしさよ

わが児のからだ<sup>ひ</sup>冷えてゆけども

かなしくも

よあ  
夜明くるまでは残りみぬ

いき はだ  
息きれし児の肌<sup>はだ</sup>のぬくもり



一握の砂

平成二十三年二月二十一日 初版

著者 石川 啄木

発行所 藍岩堂